時事詠 梅原ひろみ

筆者が二十歳の時、天安門事件が起きた。冷戦が瓦解していく社会の流れの中で強い衝撃を受け、下宿で一人涙しながらニュースを見ていたことを思い出す。あの頃短歌を作っていたなら何か詠んだらどうかと思いながら、昨今香港で起きていることに当時を重ねて心をざわつかせているのにも一つも歌にはなっていない。

時事詠とは何だろう。「歌壇」十月号が特集「平成の事件と短歌」で正面から取り組んで論じており、興味深く読んだ。

まず総論で、三枝昂之が古今集仮名序の「ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひいだせるなり」の「ことわざしげき」を「生活上の事件や行為」とした窪田章一郎の言を引いて、短歌と時事の馴染みやすさを説く。短歌はプロバガンダや単なる意見表明ではなく、個人の生活と結びついたり、作者の深い実感を伴ったときに、はじめて詩として人の心を打つのだろう。

平成の時事に特徴的であったのは、膨大な量の情報、ほぼリアルタイムでの生々しい映像だった。そこから、映像だけで安易に歌うことへの警戒や、震災に関しては当事者かどうかといった問題が議論されてきた。しかし本特集では、自らに問い直しをしつつもやはり詠っていくべきだ、という論調が多いようだ。「思わざる事件を受け止めつつ抑えきれない感情を見据える。それをどう

歌にして心に刻むのか。」(柴田典昭)。「当事者論議はモラルと文学を混同している。どんな場所から発せられようと詩は平等で、肝心なのは表現の説得力である」(三枝昂之)。「当事者ではない人間が当事者の痛みを負い、分かち合うために追及されてきた表現の数々」、「試行が繰り返され表現を開拓してきた」(松本典子)。

座談会の中でも、同時多発テロについて自分は「機知の歌」を詠んだと反省する吉川宏志に対し、米川千嘉子が「皆、反省しすぎじゃないですか。こういうのを詠っちゃいけないとか言い過ぎたら何も言えないんです」と発言している。

また時事詠が宿命的に持つ問題に、時間と共に分かりにくくなるという点がある。そのため詞書を持つ歌も多い。オウム真理教事件から四年後、一九九九年発刊の『岩波現代短歌辞典』では、「時事詠」の項で加藤治郎の「権力の近親憎悪の証とし牡牛のふとき舌をかかげて」を挙げて、「オウム真理教を強制捜査する国家のあやうさを比喻を用いて言い、文芸作品として自立したもの」と解説するが、比喻が適切なのか既に分かりにくくなっている。

一方で同じ加藤の「押収のドラム缶にはあるらーん至福の砂糖こそあるらーめ」は「歌壇」特集中でも繰り返し取り上げられ、二十年余の歳月を掻い潜ったのはこちらだったと分かる。

「一九九五・三・二二、教団施設を強制捜査」の詞書が無くても何かの捜査だと読み取れ、ドラム缶の謎の中身が只ならぬ不気味さを醸し出している。「権力の」の一首は、今となっては詞書と映像がセットになって初めて、比喻の衝撃が理解できるのかもしれない。

渦中にあつたり余韻の強い時期には作者・読者共に見え辛いことが多く、時間が名歌を洗い出していくのも時事詠の特徴だろう。